



梅雨も明け、真夏の空が広がった7月、須河車体株を訪れる。暑い日差しに向かうに緑濃い茶畑が広がる。ここ宇治は、宇治茶の名産地だ。

「京都市街地よりも涼しいですねですがね」という言葉を聞きながら、車は山あいへと向かう。木々の陰の先へと続く道路。その脇に須河車体の門が見えた。

Net Work

会員会社紹介 Vol.42

「豊かな創造力と高い技術力で次世代に向けた製品づくり」



須河車体 株式会社

取材 / (社)日本自動車車体工業会 事務局次長 橋本 茂

特徴・沿革

特装车架装、板金部品、断熱パネルの3つの事業を主軸に事業を展開している須河車体株式会社。

京都初の国産トラック専門工場として、須河車体製作所が創立されたのは昭和12年のこと。創立者の須河大一氏は、日本三大西洋鍛冶の一人に選ばれたほど優れた鍛冶職人だった。戦時中に株式会社になるが、終戦の混乱による一時閉業、創立者須河大一の死去など、幾多の困難を乗り越え、昭和21年に再開。

広告宣伝車の受注が増え始めた昭和26年、(株)須河車体製作所の発展的解散に伴い、社名を「須河車体製造(株)」に変更。昭和36年に現在の名称となった。

昭和35年に始めたボトルカー製造は、その後の会社発展への大きなターニングポイントでもあった。その後も着々と事業を拡大し、昭和63年に本社・工場を現在の京都府宇治田原町に移転、業界最高水準の設備での生産が可能となった。

現在では、中国、タイにもそれぞれ工場を設立し、国内だけに留まらず、グローバルな事業展開を行っている。また長年培ってきた技術を生かし、硬質ウレタンフォームの「オープン注入発泡製法」を開発、複合断熱パネルとして製造・販売にも力を入れている。

03年3月には品質ISO9001を取得し、これまで以上に高品質な製品をお客様にお届けできる体制となった。また今年2月には環境ISO14001を取得。緑の多い宇治田原町にあって、地域と密接に環境保全活動に取り組んでいる。

昭和12年の創業から特装车のボデー架装に力を入れてきた須河車体。その底力をこれから次の世代に繋げていくために、新たな技術への探求、開発に余念がない。須河車体の事業革新はまだまた続いている。



製品

御社で製作している主力製品についてお聞かせ下さい。

堀口社長 ボトルカーが現在主力製品です。飲料関係の車なので、夏場での用途が多い車です。以前は冬期に受注が多く、生産も大忙しでした。最近では排ガス規制などの影響もあり、年間を通して受注が来るようになり、生産も安定しています。

「ボトルカー」とひとことでもいっても、飲料メーカーによってその用途もさまざまです。一品ごとに仕様も変わります。そういったお客様のニーズに応えられるように一貫したサービス体制で臨んでいます。実際にお使いいただくお客様と営業が密に情報交換を行い、商品に反映させています。

ガス工事車

工事に必要な道具の全てを積み込み、作業へと向かう。



ボトル・カー

CADシステムなどを用いてお客様のニーズにあった車を提供。スライド扉、温度管理システムなど独自の工夫を凝らしている。またアルミボデーの外装にステッカーを貼ることで、広告宣伝にも役立っている。



人間の手と機械の手が支え合う未来。「このイラストようになるのが、これからの須河車体のあるべき姿」と堀口社長は語る。

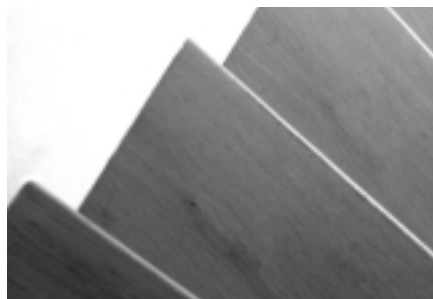


開発では3D CADを使って仕事中。ここで設計されたものが製造工程で組み立てられる。



ニーズの違う車をていねいに造り上げる。

長年の技術から生まれた『断熱パネル』



「オープン注入発泡製法」という独自の発想で生まれた硬質ウレタンフォーム。物流、食品・建築業界などにもPRしている。

人

次世代への教育はとっざされていきますが、技能の伝承ということがクローズアップされていますが、当社でも熟練の職人が持つ技能をどう繋げていくか、は一つの課題です。職人の技が必要な場面がなくなってきたとはいえ、全く消えてしまつてもないのです。

そのため技能認定制度などを設け、積極的に研修してもらっています。

先ほどのお話で「専門性の高い社員が必要」と話されましたが、そういった点での取り組みはありますか？

全管理職に対して、年初に「今年はこのように取り組みをする」という目標値を設定してもらい、1年を通して実行するようになっています。その中には部下の役割なども落とし込み、部下の能力をどこまで引き出せるかなども含まれています。

節目ごとに面談を行い、目標に対してどこまで進んでいるか確認しながら、本人だけでなく組織全体でのレベルアップを図るようになっています。

社長のモットー、今後の抱負などについてお聞かせ下さい。

今後は専門性の高い社員を育成して、事業を推進したいと考えています。雇用形態がさまざまに変化する中、とれだけ専門性の高い社員、創造性の豊かな社員を抱えていけるのが大きな目標です。

さらにボトルカーをもっと進化させて、今の時流にあった車にする必要性を感じています。それには当社の受注から生産までのプロセスを見直す必要があり、今まさに取り組んでいる最中です。